からだとは・病とは(4) 漢方と鍼灸

鈴木斉観（せいかん）（斉観堂鍼灸・気功治療院院長）

鍼灸・気功治療をする私が漢方薬について語るのを不思議に思った方もいるかもしれない。鍼灸と漢方薬は同じ東洋医学といっても、その拠り所とする内容は通常かなり違っている。

東洋医学の最も重要で古い古典は『黄帝内経』と『傷寒雑病論』である。『黄帝内経』は『素問』・『霊枢』に別れ、『傷寒雑病論』は『傷寒論』・『金匱要略』に分かれる。通常、鍼灸家は『素問』・『霊枢』を学び、漢方薬を使う治療家は『素問』と『傷寒論』・『金匱要略』を学ぶ。

『傷寒論』・『金匱要略』はどういう病態（証）の時にどんな薬方を使うかが記されている。漢方薬の古典であって、鍼灸家には不要なものと思われている為に通常、鍼灸家は学ばないのである。ところが私の流派では、鍼灸家にも学ぶべき必須の古典になっている。それは漢方薬を使う為ではない。万病に通じる病態と、その変化が読み取れるからである。患者や自らの‘からだ’における病を観察した経験に照らして、それを読むと、‘気’的な‘からだ’の歪みが読み取れる。異常な‘気’や水毒や血毒のあり方。寒（冷え）と熱にどのように分離しているか。そうしたことがどう変化し、病態が変わっていくかが読み取れる。

カゼが鼻・口から入って、ノド、そして胸へと侵入するに従って、病態（証）そして症状は変化していく。

その一つのモデルを見ると、①先ずノドや鼻、頭の症状が出るがまだ激しくない状態（桂枝湯証）となる。カゼに入られたのは、‘からだ’が何らかの原因で冷え、免疫力が落ちていたからであり、この病態においては、症状の出ている熱的部分の存在と共に免疫力を落としている寒の存在が大きい。だから桂枝湯には寒に対する生薬が多く入っている。鍼灸ならば、頭・首・肩にカゼと熱を取り除く施術をした後に、腹の滞りをなくし寒を温める施術を行う。

カゼは更に胸にまで少し入り込む。②咳をするようになり、ノド・鼻・頭の症状も激しくなり、かなり熱っぽくなった状態（葛根湯証）と変化する。更に本格的に胸に入り込むと、③咳も激しなった状態（麻黄湯証）となる。この状態になると、治療の焦点は胸より上の熱的部分に対するものだけになる。麻黄湯は麻黄、杏仁、桂枝、甘草の４種の生薬からなるが、麻黄、杏仁が胸、桂枝が頭に作用する。鍼灸ならば胸から上のカゼと熱を取り除く施術になるが、桂枝湯証の場合よりもその範囲は広く深くなる。

そしてこじらせて腹近くまで侵入されると、④胃症状も出てくる状態（小柴胡湯証）となる。更に侵入され腹に至れば、⑤便秘するようになる（小承気湯証）。

これらの状態ではまだ‘からだ’は元気で熱的な症状が中心であり、陽証という。長引くと元気衰えて、寒（冷え）が大きくなり、熱は局所的になる。陰証という。

このような形で様々な病態が明らかにされている。東洋医学的な病理学である。だから『傷寒論』『金匱要略』は治療に用いる道具のいかんを問わず、東洋医学の治療家が学ぶべき古典なのである。

西洋医学が病を様々に区別していこうとする方向とは正反対であり、万病帰一のとらえ方である。そして西洋医学が形の上で発展し進歩するのとも反対に、東洋医学は古典において完成されていて、それをいかに読み取るか、現在の状況に応用するかが現代人に課せられている。こうしたことは、他の伝統技芸でも同じであることを思い出して欲しい。

「ウコンは肝臓に良い」と単に生薬をとることが漢方だと誤解されているように、肩凝りならば肩、腰痛ならば腰に施術する局所施術が鍼灸だと誤解されている。また「カゼに葛根湯」「慢性肝炎に小柴胡湯」という病名漢方が本来の漢方と誤解されているように、「食欲不振に三里のツボ」「生理痛に三陰交のツボ」というツボ療法が鍼灸だと誤解されている。ある症状を生む、病んだ‘からだ’が見えていない。‘からだ’全体のつながりが見えていない。こんな浅薄のものは東洋医学とは言えない。

古典をろくに学ばない医師が病名漢方を行うように、古典はほとんど学ばず、西洋医学を学んでいる鍼灸師が局所施術でよしとし、またツボ療法を行っているのである。

私の『傷寒論真髄』（横田観風著）の表紙をめくると「鍼薬一如」と書されている。師・横田観風の書である。

（2004年４月穀雨）